



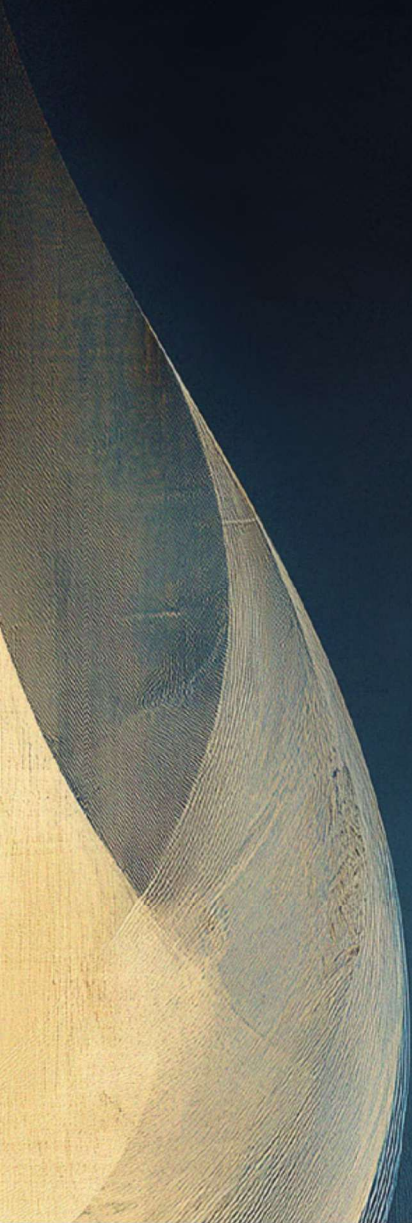
み国が来ますように

祈りのしおり



日本聖公会

2026年5月14日～5月24日



もくじ

- | | |
|----|-----------------------------------|
| 3 | はじめに |
| 7 | 1日目 天におられる私たちの父よ |
| 9 | 2日目 み名が聖とされますように |
| 11 | 3日目 み国が来ますように |
| 13 | 4日目 みところが天に行われるとおり
地にも行われますように |
| 15 | 5日目 わたしたちに日ごとの糧を
今日もお与えください |
| 17 | 6日目 わたしたちの罪をおゆるしてください |
| 19 | 7日目 わたしたちも人をゆるします |
| 23 | 8日目 わたしたちを誘惑におちいらせず |
| 25 | 9日目 悪からお救いください |
| 27 | 10日目 国と力と栄光は、
永遠にあなたのものです アーメン |
| 29 | 11日目 聖霊降臨 |

はじめに



『Thy Kingdom Come (み国が来ますように)』は、昇天日から聖霊降臨日にかけて行なわれる世界的な祈りの運動で、今年 11 年目を迎えます。2016 年にカンタベリー大主教とヨーク大主教の呼びかけではじまって以来、172 カ国、85 教派以上のキリスト者が、友人や家族がイエスさまを信じるようになるよう祈ってきました。『み国が来ますように』と祈るすべての人々が、イエスさまとの交わりを深め、イエスさまの証人となるための自信を新たにし、他の人をイエスさまのもとに導くことを目的としています。

イエスさまは昇天される前に、「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで、私の証人となる。」(使徒言行録 1:8) と約束され、弟子たちは、心を合わせて、ひたすら祈りをしていました(同 1:14)。このことをお手本にして、私たちもこの期間に祈りに励みましょう。

祈りの期間は、昇天日(5月14日)から聖霊降臨日(5月24日)までの11日間です。具体的には、イエスさまの愛と平和を知ってほしい友人や家族・知人5名を選び、しおりに名前を記して、その人たちのために11日間祈っていきます。

日本聖公会も、この運動に 2020 年から参加してきました。今年の各日のテーマ（主の祈り）は、2025 年の英語版から引用し、聖書の箇所やみ言葉の解説、祈りなどは各教区主教と管区事務所総主事・宣教主事が担当して作成しました。

昇天日から聖霊降臨日の間の、希望に満ちた待望と祈りの日々の中で、私たちがみな、聖霊によって新たにされ、キリストにあって新たにされますように。

日本聖公会主教会



Thy Kingdom come のウェブページ
日本語のページも用意されています。
祈りの登録や各種資料も準備されています。
<https://www.thykingdomcome.global/>



祈りのしおりは、いつでもどこでも用いていただけますが、例えば 1 日のはじめの朝に、朝食後や仕事を始める前に、教会から少し離れている人や、イエスさまのところに導きたい人を 5 人（3 人でも 10 人でも自由に）覚えてください。グループで共通の 1 人を覚えてもよいと思います。

同じ時間にウェブでつながって用いることもできますし、後日に繰り返し用いることも可能で、いつでもどこでも自由に祈りの手引きとして用いてください。

手順の例としては、

- ① 「み国が来ますように」の祈りを唱え
- ② み言葉を味わい（前後の箇所を含めて読み、思い巡らせるなど）
- ③ 各メッセージを味わい（グループなら感想を述べあうなど）
- ④ 祈りをゆっくりと心を込めて唱え
- ⑤ 5 人のことを覚えて祈り（一人ひとりを覚えるなど自由に）
- ⑥ 主の祈りと祝祷で終わる

といった具合に用いることができます。

※ 聖書は、『聖書 聖書協会共同訳』を使用しています。

The Prayer for Thy Kingdom Come 「み国が来ますように」の祈り

全能の神よ、あなたは天に昇ったあなたのみ子によって、み国の福音を宣べ伝えるようにと、私たちをこの世に送り出されました。どうかあなたの霊によって私たちにひらめきを与え、私たちの心にあなたの愛を灯してください。そして、あなたの言葉を聞くすべての人が、あなたのもとに集えますように、主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン

以下に、あなたがこの期間中、祈りに覚えたい人たちの名前を書いてください。
そして、神さまがそれらの人々の人生や生活を変えくださるよう祈りましょう。

1.

2.

3.

4.

5.

1 日目 天におられる私たちの父よ

み言葉

思うに、今この時の苦しみは、将来私たちに現されるはずの栄光と比べれば、取るに足りません。被造物は、神の子たちが現れるのを切に望んでいます。被造物が虚無に服したのは、自分の意志によるのではなく、服従させた方によるのであり、そこには希望があります。それは、被造物自身も滅びへの隷属から解放されて、神の子どもたちの栄光の自由に入るという希望です。

(ローマ 8 : 18-21)

旧約聖書では、神をひとつの言葉やひとつの性別では表現してきませんでした。それは神を人間の理解の範疇に小さく収めてしまい、神の超越性や卓越性を損なってしまうからです。旧約聖書の中で直接神を「父」と表現しているのは 15 箇所のみと言われています。そしてそれぞれの時代や状況に応じたさまざまな表現や比喻を使い、人間の理解を遥かに超えた神を示そうとしてきました。新約聖書においても、多様な神の表現方法は引き継がれています。

その上で、主イエスは天地の創造主を「父」と、しかも親しく、少し幼さを残した言葉で、「アッパ」と呼ぶようにと弟子たちに促します (マタイ 6:9)。また、「地上の者を『父』と呼んではならない。あなたがたの父は天の父お一人だけだ」(マタイ 23:9)

とも記しています。さまざまな分断の壁を壊し飛び越えて、神の愛の宣教のお働きをこの世界にもたらしてくださった主イエスのお姿とは重ならないようにも思えます。これは、1世紀のローマ帝国において、ゼウスが「天の父」、地上における神の代理者としての皇帝が「父」と呼ばれ、崇拝されていたことに起因すると言われていています。圧倒的な力による平和を築いていたローマ帝国の支配や圧政への抵抗を、祈りの呼びかけの言葉を通して表現しているのです。

天上と地上をひとつにつなげてくださる神が、被造物にすぎない人間をキリストと同様に神の子としてくださっていることを、主の祈りを唱える度にわたしたちは確認します。

「天におられるわたしたちの父よ」という呼びかけは、この世の他の一切の力によらず、神のみがこの世界を救ってくださるお方であることを告白します。主の祈りは、被造物全体がいまだ呻き産みの苦しみを共にしている現代にあって、神の子として、世界のために神に祈り、神の愛と平和の働きに参与するようと、わたしたちを招いています。

祈り

天地を造られた主よ、あなたの御子イエス・キリストは天に昇られ、あなたとともにこの世界を治めておられます。日々繰り返し主の祈りを唱えるわたしたちを、あなたの子として整え、あなたがこの地上にもたらそうとしている愛と平和の御国の実現のために大胆に用いてください。わたしたちの主、イエス・キリストによって。アーメン

2日目 み名が聖とされますように

み言葉

私は彼らに御名を知らせました。また、これからも知らせます。私を愛してくださったあなたの愛が彼らの内にあり、私も彼らの内にいるようになるためです。」

(ヨハネ 17 : 26)

イエス誕生物語で、イエス様は「インマヌエル（神は私たちと共におられる）」というお方であると伝えられています。この方は、「世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」という永遠の約束を残してくださいました。

今もいつまでも共にいてくださるのはどうしてでしょうか。それは、「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。御子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るため」です（ヨハネ 3 : 16）。

では、私たちは神の子・独り子であるイエス様とどういう関係になれたら宜しいのでしょうか。それは、イエス様のいのちに素直に預かることです。イエス様は「道であり、真理であり、命」です、「良い羊飼いです」、「羊囲いの門」です、「まことのぶどうの木」です、「復活であり、命」です。

神様は、イエス様を通じて私たちに愛をもたらしておられます。イエス様がなされた万人への慈しみと、分け隔てのない慈悲と、神様への純真な信頼こそが、神様の大きい喜びであることを、私たちは知らされました。このイエス様のお心が、私たちの中にも生じて主の御名を賛美する時、私たちは永遠の命に輝いているはずです。私たちが、生き活きとイエス様にまったく拠り頼んでいられるように祈りましょう。

祈り

愛と慈しみに満ちておられる神様、あなたはイエス・キリストをこの世にお遣わしになり、あなたの愛を示されました。さらに、十字架と復活によってもっと深く偉大な愛を、罪深い私たちにお与えくださいました。どうか、私たちがあなたの愛に応え、私たちをこの世に生きる力と希望をもたらす者としてくださいますようお願いいたします。どうか、復活であり命であるインマヌエルの御子と共に歩む道を祝福しお導きください。憐れみ深い、主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン

3日目 み国が来ますように

み言葉

御国が来ますように。

(マタイ 6 : 10a)

イエスさまのイメージは人それぞれでしょう。それは、いつ、どのようにイエスさまから出会っていただいたかにもよることでしょう。優しいイエスさま、時に厳しいイエスさま、温かく見守ってくださるイエスさま等々、様々でしょう。けれども、恐怖心を煽ったり、人を苦しめ脅したりするような方ではいらっしやらないことは明らかです。

イエスさまがみ国を語られる時、そこには明るさや希望が秘められています。そして、そこでは癒しがあることにも気付かされます。

今、世界中が不安と混乱に満ちています。そして、癒しを求めてもいます。「とてもではないが、み国など来ていない」と、悪魔の囁きに惑わされもします。私たちは「み国が来ますように」と祈る時、まだ来ていないから早く来ますようにと思うこともあるでしょうが、既にみ国の働きは始まっており、今も続けられています。「み国が来ますように」祈る時「そのために私たちを用いてください、ともに働かせてください」という、私たちが捧げる祈りを伴わせたいと強く思います。

祈り

主よ、あなたは尊い独り子を、み国の成就のためにこの世に遣わされ、私たちの日々のいのちの営みの中で働きを成し続けておられます。

けれども、私たちは心の暗さゆえ、弱さゆえに、み国があたかも来ていないかのような思いに苛まれもします。どうか、弱い私たちを助け、心の闇を取り除き、日々あなたのみ国を仰ぎ見させてください。そして、み国の完成へ向けて、私たちの祈りと働きを支え導いてください。み国のための働き人、仕え人として私たちを用いてください。主イエス・キリストのみ名によってお祈りいたします。アーメン

4日目 みこころが天に行われるとおり 地にも行われますように

み言葉

彼らに言われた。「私は死ぬほど苦しい。ここを離れず、私と共に目を覚ましていなさい。」少し先に進んでうつ伏せになり、祈って言われた。「父よ、できることなら、この杯を私から過ぎ去らせてください。しかし、私の望むようにではなく、御心のままに。」

(マタイ 26 : 38-39)

主イエスさまは十字架の苦しみを目前にされて、ペトロとヤコブとヨハネ、この3人の主(おも)だった弟子を連れてゲッセマネで苦しみ悶えつつ祈り始められます。そして、彼らに「死ぬほど苦しい」とご自分の思いを吐露されました。

人はだれも、その生死にかかわる場面であれば、命を保つことが何よりも優先されてしかるべきでしょう。

しかし、十字架の死が目前に迫りくる中、イエスさまはご自身の命ではなく御父の御心の実現を祈り求めておられます。

御父の御心が行われるところ、それが天の御国であるならば、その御心が地上においても行われることは、御国の到来の実現ということです。

十字架の死を前にして、イエスさまは苦しみ悶えながらも御父の御心を切に祈り求められます。なぜなら、そのためにイエスさまは人となられて世に来られたからです。

イエスさまがご自分の命を求めるのではなく十字架の苦しみと死を御父の御心として求められたからこそ、そこに人類の救いは実現されました。十字架の死に至るまで父なる神の御心を求められたイエスさまのみ跡に倣い、私たち自身も世に御心を証しし現わす器となることを何よりも願い求めて参りたいと思います。

祈り

主イエス・キリストの父なる神よ、あなたは愛する御子の十字架の苦しみと死をもって私たちの罪をことごとく贖い、死すべき者を御国の命に招き入れてくださいました。どうか、あなたを愛しあなたに寄り頼む信仰を私たちに増し加え、御子に倣い、世にある自らの命よりもあなたの御心が叶えられることを願い求める心をお与えください。そして、この世界があなたの御心に満ちたものとなり、天の御国が完成されますように。私たちの罪を負われ、その贖いとなられて十字架に死に甦られた御子イエス・キリストによってお願いいたします。

アーメン

5日目 わたしたちに日ごとの糧を 今日もお与えください

み言葉

私たちに日ごとの糧を今日お与えください。 (マタイ 6:11)

「私たちに日ごとの糧を今日もお与えください」という祈りの言葉は、ただ単に食べ物を求める願い以上の意味を含んでいます。この言葉の深奥には、人間が自分の力だけで生きているのではなく、毎日の<いのち>が何か大きな恵みによって支えられているという、確信があります。

私たちは普段、明日の予定や将来の計画を立て、できるだけ多くのものを手に入れようとします。しかし、この祈りが求めているのは「明日や一年先の糧」ではなく、「今日の糧」なのです。ここには、人間が生きることの本質が示されているように思うのです。どれほど準備を整えても、私たちは結局のところ「今日」という一日を与えられて生きるしかない存在なのです。

また、「糧」という言葉は、パンや食事だけを指すではありません。人が生きていくためには、食べ物だけでなく、励ましの言葉や誰かとの出会い、希望を感じさせる出来事など、心を支えるものがが必要です。時には、思いがけない親切や、困難の中で

差し伸べられる助けが、その日の「糧」となることもあります。

私たちがこの祈りを唱える時、人は自分がいかに多くの恵みによって生かされていることに気づきます。そして同時に、自分だけが満たされればよいのではなく、他の人々にも日ごとの糧が与えられるよう願う心が生まれます。もし誰かが飢えや孤独の中にいるなら、私たち自身がその人にとっての糧の一部になれるかもしれません。

「今日の糧」を求める祈りは、未来への不安にとらわれすぎず、与えられた一日を大切に生きることを意味を思い出させます。そして、自分が受け取った恵みを、今度は他者と分かち合う生き方へと、静かに私たちを導くのです。

祈り

主なる神さま。主イエス・キリストは、私たちに「日ごとの糧を今日もお与えください」という祈りを備えてくださいました。どうか、私たちが生きていくための糧をお与えください。そして、また、私たち自身が、苦しみ、悲しみにある人、人生の飢え、渇きにある人々にとっての「糧」となることができますように、どうぞ、強め、励ましてください。

この祈りを、尊き主イエス・キリストのみ名を通して、み前におささげいたします。アーメン

6日目 わたしたちの罪をおゆるしてください

み言葉

私たちの負い目をお赦してください。

(マタイ 6:12a)

日曜日の朝、こどもたちとの礼拝の時、懺悔の部分も共にお祈りしています。この懺悔の祈りは、小学生の頃、日曜学校でお祈りしていた祈りと、ほとんど同じものです。

この祈りを祈りながら、こどもたちはどんなことを心に思い描きながら祈っているのだろうかといつも思っています。

そして時々、小学生だった時のある出来事を思い出すのです。それは3年生ごろのことでした。午後3時ごろ、いつものように近所の駐車場に行ってボールをブロック塀に投げ、跳ね返ってきたボールをキャッチする遊びをしていた時のことでした。何回目かの時、跳ね返って来たボールに軽くバットを当てた瞬間、そのボールがブロック塀の上の方に開いている穴を通過して隣の家に飛んで行ったのでした。次の瞬間「ガチャーン！」というガラス窓の割れた音がしました。私は一瞬あたりを見回して、逃げるために駆けだしたのです。ところが駐車場から出た時に、ばったりと買い物帰りのそのお隣さんとはちあってしまったのでした。

とっさに私は事情を話し謝ったのでした。あとで母から聞いた話ですが、そのお隣さんから、「あなたのお子さんは偉いですね。ちゃんと謝ることができて」とお褒めの言葉を頂いたということでした。

しかし謝ったのは、とっさに逃げようとしたけれども逃げ切れないと思っただけで、もし誰にも見つからなければきっと逃げて、黙っていただろうなと思うのです。同時にもし黙っていたなら、罪の思いをずっと抱え続けていたのかもしれないとも思うのです。

謝る時には、心から謝りたいと思います。この出来事はもしかしたら、謝ること、謝るきっかけ、また自分の心を見つめるようにと神さまが働いてくださったのかもしれない。

祈り

罪を赦してくださる神さま、あなたは私たちの間にある、間違った関わりや、負い目、罪に対して、やり直しができるようにイエス様を通して気づきと支え、励ましと導きをお与えください。どうか、私たちが素直に謝ることができますように。この祈り、主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン

7日目 わたしたちも人をゆるします

み言葉

その時、ペトロがイエスのところに来て言った。「主よ、きょうだいが私に対して罪を犯したなら、何回赦すべきでしょうか。七回までですか」。イエスは言われた。「あなたに言うておく。七回どころか七の七十倍までも赦しなさい」。

(マタイ 18:21)

わたしたちが十字架を仰ぎ見る時、わたしたちは心の中でどう思うでしょうか。「神様、私はほかの人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦通する者でなく、また、この徴税人のような者でないことを感謝します」(ルカ 18:11)と思うでしょうか。それとも「神様、罪人の私を憐れんでください」(同:13)と胸を打ちながら祈るでしょうか。「人をゆるす」という尊い感情は冒頭のみ言葉の通り主イエスの厳命ですが、同時にそれはわたしたちの心の状態に大きく左右されるものといっても過言ではないでしょう。

わたしたちは誰もがこの世に生まれてから今日に至るまで、何度となく人を憎んだり恨んだりしてきたことでしょう。人間として生まれた限り、こうした怒りの感情を抱くことはむしろ当然といえるかもしれません。

しかしながらそれでも主イエスは、「人を裁くな。裁かれない

ためである。あなたがたは、自分の裁く裁きで裁かれ、自分の量る秤で量られる。」(マタイ 7:1-2) と、人を裁かずに赦すことをわたしたちに求めています。

また現行犯逮捕され、律法で石打の刑に処せられるべき女性を前に、それでも主イエスはおっしゃいました。「あなたがたの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい。」(ヨハネ 8:7b)。そして怒り叫んでいた人々は、「年長者」から次々とその場を去りました。

わたしたちは子供のころから社会人になって年を重ねてなお、自分は絶対正しい、アイツこそ悪いんだといった「決して赦さない」感情を抱いてしまうことしばしばです。そのような怒りに満ちたわたしたちの心の中に神様の愛は存在せず、主イエスの厳命さえ忘れて「自己神化・自己絶対化」した自分自身が無自覚的に存在します。

そんな状態のわたしたちの心に最も欠かせないもの、それは“MEA CULPA (我過てり)”との徴税人の悔悛の念ではないでしょうか。言いかえれば聖パウロをはじめヒッポの聖アウグスティヌスや、「塔の体験」で有名なルターの回心のように、時には少しずつ、時には瞬間的に、罪に死すべきわたしたちを無条件で赦してくださった、主イエス最大の愛に満ちた贖いの十字架が、わたしたちの心の中心に優しくかつ確実に備わってはじめて、わたしたちも必然的に人を愛し、そして人を赦すことができるようになるのだと思うのです。

ロシアによるウクライナへの軍事侵攻から始まって今、世界中で思想信条の違いによる国家間の武力闘争が絶えません。多くの国々で一体どれほど尊い命が奪われてきたことでしょう。まるで「人を赦しなさい」との主イエスの厳命さえ、

ミサイル攻撃で吹き飛ばされたかの様相を呈しています。

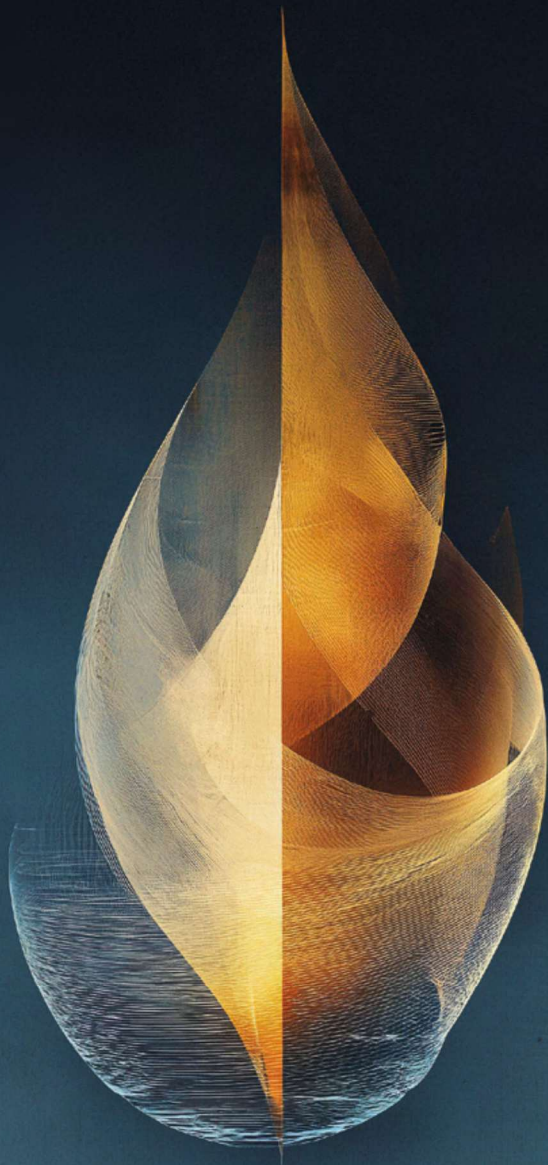
インド独立の解放者として今でも尊敬されているマハトマ・ガンジーの、有名な逸話のひとつに次のようなものがございます。

一人のヒンドゥー教徒が、ガンジーに悩みを打ち明けるべくやって来ました。「先生、わたしの息子がイスラム教徒に殺されました。そのあまりの悲しみと怒りで、わたしもイスラム教の子供を一人殺しました。しかし私の怒りはおさまるところか、その子供の悲鳴とともに悲しみがもっと大きくなりました。先生、わたしは一体どうしたら心から癒されるのでしょうか」。ガンジーは静かに言いました。「あなたが救われる方法が一つある。ヒンドゥー教徒に両親を殺されたイスラム教の孤児を、あなたの養子として育てなさい。しかもヒンドゥー教徒ではなく、イスラム教徒として育てなさい」・・・。

わたしたちも神様から無条件で赦された者の一人として、これからも贖いの十字架によって示された主イエスの愛を抱きつつ、人々を赦し続けたく願うものです。

祈り

わたしたちに愛と赦しの心をお与えくださる全能の神様、あなたのひとり子イエス・キリストが十字架上で苦しみを受けられ、そして息を引き取られたことによってわたしたちの罪が赦されたことを深く心に留め、わたしたちもこれからの信仰の歩みの中で人を赦し、人を愛することによって、あなたのみ栄えを表すことができますように、贖い主イエス・キリストのみ名によってお願いいたします。アーメン



8日目 わたしたちを誘惑におちいらせず

み言葉

誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい。心ははやっても、肉体は弱い。(マタイ 26:41)

長年、同じ祈りを捧げていると、私たちはじつにテンポよく唱えることができるようになります。しかし、あまりにも立ち止まることなく、言葉を口にします。あらためて、この誘惑とは何かを考えましょう。誘惑はギリシャ語で「ペイラスモス」と言います。これは、試練とも訳される言葉です。

誘惑と言ってすぐに思い出すのは、なんと言っても主イエス・キリストが公生涯に入られて初めに経験された荒れ野での誘惑です。聖霊によって荒れ野へと導かれたイエスさまは、それから断食し、ひとり祈られました。そして空腹になった時、悪魔が忍び寄ってきて誘惑します。「この石にパンになるように命じたらどうだ」。この言葉が大変象徴的です。

続く誘惑の言葉も合わせて、要するに悪魔は、与えられたもの、また持てる力はすべて自分のために使えば良いと働きかけます。この誘惑に対してイエスさまは、「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」と、決して

悪魔に屈することはありませんでした。

この出来事に触れていると、その後も悪魔の誘惑は、世界にはっきり存在しているのを感じます。そしてまさに今、私たちの世界には、悪魔の誘惑に屈服していると思われる状況がたくさん目につきます。

いつでも自分を優先し自己利益ばかりを追求する。これは個人に限ったことではなく、あらゆる集団、さらに民族や国家のレベルになっても、自分たちばかりを優先させようとする生き方は、まさに悪魔の手中に落ちた姿にほかなりません。

混迷を極める現代の状況の中でこそ、私たちは神の口から出る一つ一つの言葉を胸に刻んで歩んでいきたいのです。あらためて、心に響いてくるみ言葉にじっと耳を傾けましょう。

祈り

主よ、日々の雑踏の中に、小さくまた目立たず、しかしたしかに響いてくるあなたのみ言葉に、私たちが心に向け、従う者となることができますようにお導きください。

誘惑に飲み込まれることなく、むしろ自分の心身を磨き上げる試練としてください。

自己中心から解放され、人を愛し、互いに愛し合って生きることができるよう。

主のみ名によって アーメン

9日目 悪からお救いください

み言葉

悪からお救いください。

(マタイ 6:13b)

「主の祈り」の最後の祈禱文です。何故主イエスさまは、このみ言葉を最後にしたのでしょうか。

創造の初めから、悪魔は狡猾に動いています。悪魔はアダムとエバを唆し、神さまが食べるなと命じていた善悪の知識を知る木の実を食べさせました。ヨブはお金持ちで神さまに忠実でした。でも、悪魔に妬まれ財産と子供たちを失いました。イエスさまも宣教の始め40日40夜の断食の後、悪魔から誘惑に合いました。私たちの周りは誘惑に満ちています。誘惑の根源は神ではなく、悪魔です。この世界です。でも、私たちは世を離れては生きられません。それで主イエスさまは告別説教の最後に、神さまにこの世に残る弟子たちを、「悪い者(悪)から守ってくださる」(ヨハネ17:15)ように祈られました。

ヨハネは罪の原因に、肉の欲、目の欲、生活のおごり(1ヨハ2:16)があると述べます。健康な人なら、お腹が空いていれば食事を欲します。食べてなくても、食欲も湧かず空腹を感じないなら病気です。肉の欲は生死に関わります。欲しいものがあれば、働い

てお金を貯め手に入れる人もいます。何か新奇な物を見て、自分も作ろうと努力する人もおられます。目の欲がその人を自己成長へと促すケースもあります。おごりや高ぶりは決して良いとは言えません。でも、おごり高ぶりたくて、懸命に働き節制し、暮らしや生活を豊かにもする人もおられます。肉の欲、目の欲、生活のおごりが一概に悪いとは断定はできません。

ヨハネは肉の欲、目の欲、生活のおごりはこの世から出ると述べています。問題は、人の心や関心がどこにあるかです。イエスさまは「あなたの富のあるところに、あなたの心もある。」(マタイ 6:21)と教えます。神さまに心や目を注いでいないなら、健康も、素晴らしい作品も、豊かな暮らしも罪となります。パウロは、「食べるにしろ飲むにしろ、何をするにしても、すべて神の栄光を現すためにしなさい。」(一コリ 10:31)と述べました。それが、悪から救われる道ではないでしょうか。

祈り

天の神さま、私たちの心や目、耳、口、手、足があなたから離れて別な所に私を連れて行かないようにしてください。キリストが十字架の死に至るまであなたに従順であられたように、私たちもあなたに従えますように、誘惑からお守りください。イエス・キリストのみ名によって。アーメン。

10 日目 国と力と栄光は、

永遠にあなたのものです アーメン

み言葉

さらに、悪魔はイエスを非常に高い山に連れて行き、世のすべての国々とその栄華を見せて、言った。「もし、ひれ伏して私を拝むなら、これを全部与えよう。」すると、イエスは言われた。「退け、サタン。『あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ』と書いてある。」そこで、悪魔は離れ去った。すると、天使たちが近づいて来て、イエスに仕えた。(マタイ 4:8-11)

イエスさまは、ヨルダン川でヨハネから洗礼を受けられ、「これは私の愛する子、私の心に適う者」と天からの声を聞こえ、悪魔から試みを受けるために霊に導かれて荒れ野に行き、四十日四十夜、断食をされました。悪魔は、「もし、ひれ伏して私を拝むなら、これを全部与えよう」とイエスさまを試します。イエスさまは、「あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ」という聖書の言葉(申命記 6:13)によって、サタンを退けられました。

国と力と栄光は、唯一の神さまのものであること、私たちがこの世に存在させてくださっているのは、主なる神さまである

ことを、主の祈りの最後に唱えて心に刻みます。そのことを忘れ、主を拝み、主に仕える心をないがしろにしてしまう時、武力によって国を支配し、間違った力の使い方によって人を傷つけ、自分ファースト・自分たちファーストの栄光を求めて異質なものを排除したい衝動にかられます。イエスさまの生き様に倣い、悪魔からの誘惑としてではなく、愛と平和のみ国を実現するための神さまからの試練として受け止めて、「国と力と栄光は、永遠にあなたのものです アーメン」とこれからも唱え続けていきたいと思います。

祈り

私たちを守り、いつくしんでくださる神さま、あなたによしとされ、一人ひとり、一つひとつにいのちが与えられていることを心より感謝いたします。あなたによって創造された大切ないのちであることを忘れ、自己本位な思いを抱いてしまう私たちの弱さを顧み、いつもあなたに向かって目をあげさせてください。国と力と栄光は、永遠にあなたのものですと、いつも告白し、あなたと世界と人々の声に耳を傾けて仕える者とならせてください。平和の君、み子イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン

11 日目 聖霊降臨

み言葉

イエスは重ねて言われた。「あなたがたに平和があるように。父が私をお遣わしになったように、私もあなたがたを遣わす。」そう言うってから、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。」
(ヨハネ 20：21-22)

イエスが十字架の上で死なれた後、弟子たちは恐れに閉ざされていました。ユダヤ人を恐れて戸に鍵をかけ、主の死による深い絶望の中で、心の戸までも閉ざしていたのです。それは主との関係、また人々との関係の断絶を意味しています。しかし、閉ざされた戸を越えて主は来られ、彼らの真ん中に立って「あなたがたに平和があるように」と告げられます。この一言によって関係は回復し、弟子たちの混乱と恐れは静められました。聖霊の働きとは、断絶を越えて関係を結び直す力なのです。

聖霊降臨の日、弟子たちは聖霊に満たされ、さまざまな国の言葉で神の言葉を語りました。聞いていた人々も、それぞれ自分の国の言葉として理解し、そこに「通じ合う」出来事が起こりました。バベルの塔によって分断された言葉と心が、キリストによって再び結び合わされたのです。神と人、人と人との間に閉ざ

されていた扉が開かれ、出会いの恵みが回復しました。

しかし私たちもまた、憎しみや偏見によって互いに通じ合えず、心を閉ざしてしまふことがあります。そのような私たちに、復活の主は今も「あなたがたに平和があるように」と語りかけ、聖霊の息を吹きかけてくださいます。聖霊によって一つとされるとき、神と人と世界の声に耳を傾ける私たちは、その声を聴き取り、真に通じ合うことができます。そして、主が望まれる平和を守り、また創り出す者とされるのです。聖霊なる神の豊かな導きが、私たちとともにありますように。

祈り

主なる神よ、あなたはシナイ山において火と雲のうちにモーセに律法をお授けになり、また聖霊の炎をもって弟子たちに新しい契約をお与えになって、彼らを、大胆に福音を宣べ伝える者とされました。どうか私たちの心を、尽きる事のない聖霊の恵みで満たし、聖霊が結ばせてくださる愛と喜びと平和の実を豊かに実らせてください。さらに、あなたの救いと愛とを隣人に証しし、世の人々を主のみもとへと導く者とならせてください。み子イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン



発行：日本聖公会管区事務所

